2025 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**ヴィクトリア朝小説におけるディサビリティとセンセーション －センセーション・フィクション再考－**
キーワード	①ヴィクトリア朝文学、②センセーション、③ディサビリティ

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	ゴトウ　チヒロ 後藤　千宏
配付時の所属先・職位等 （令和７年４月１日現在）	学習院大学文学部英語英米文化学科 助教
現在の所属先・職位等	東洋大学食環境科学部 非常勤講師
プロフィール	学習院大学人文科学研究科英語英米文学専攻博士後期課程を単位修得退学後、2023 年度に英語英米文化学科の助教に着任した。任期満了で退職し、現在は東洋大学食環境科学部で非常勤講師を務めながら、博士論文を執筆している。イギリス文学を専門としており、特にヴィクトリア朝の小説をセンセーションとディサビリティというテーマで分析している。人類にとって文学は必要なものである、という信念のもと日々文学を楽しみ研究を進めている。

1. 研究の概要

本研究は、ヴィクトリア朝小説におけるセンセーションとディサビリティの表象を探求した。ヴィクトリア朝中期に流行したセンセーション・フィクションは、これまで主流の文学からは外れたサブジャンルとして位置づけられてきたが、1970 年代のフェミニズム批評よりこのジャンルの再評価が始まった。センセーション・フィクションは、当時神聖な場所として絶対視されていた家庭を舞台にし、その中で起こる殺人・詐欺・不倫などのセンセーショナルな出来事を描く。そのため、当時の理想化された家庭や女性を巡る言説の矛盾を暴くような内容が、研究者たちの間で評価されるようになった。本研究は、センセーション・フィクションを再評価するこの流れに位置づくものである。そして 2010 年代以降盛んに論じられるようになったヴィクトリア朝文学におけるディサビリティ表象についての研究を踏まえ、センセーション・フィクション作品と同時代の正典作品を分析し、作品で描かれるディサビリティがセンセーショナルな出来事と密接に関わっていることを明らかにした。この分析によって、センセーション・フィクションが、ディサビリティを巡る否定的な言説に疑問を呈するためにセンセーショナルな要素を利用したジャンルであり、その点において最も上手くセンセーションを利用したジャンルであると明らかにすることを試みた。

2. 研究の動機、目的

本研究は、センセーション・フィクションの再評価に貢献することを目的とした。センセーション・フィクション研究はこれまで、フェミニズム、ジェンダー、階級、人種、ポストコロニアリズムなどの観点から行われてきた。本研究は、このジャンル作品をディサビリティの観点から読み直した。ディサビリティは、昨今ヴィクトリア朝文学・文化研究において注目されるテーマである。ヴィクトリア朝文学の括りの中でセンセーション・フィクション作品に描か

れるディサビリティについて研究されることはあった。しかしこのジャンル作品がディサビリティの表象を肯定的に描いているという視点で論じる研究はまだ少ない。本研究では、このジャンルの創始者として考えられているウィルキー・コリンズ、メアリー・エリザベス・ブラッドン、ヘンリー・ウッド夫人の作品を研究対象とすることで、このジャンルにおけるディサビリティ表象の特徴を提示することを目指した。

加えて本研究は、ヴィクトリア朝小説におけるセンセーショナルな描写がどのような観点で重要性を持つのかを明らかにするために、作品内のセンセーショナルな要素がディサビリティとどのように関連しているのかを考察した。センセーション・フィクションでは、プロットの中心であるセンセーショナルな出来事・事件にディサビリティを持つ登場人物が関わっていることが多いため、それらの関連性の意義を考察した。さらにセンセーショナルな要素は、センセーション・フィクションに限らず正典作品にも見て取ることができ、同じようにディサビリティを持つ登場人物が関わっている。そのため、センセーショナルな要素とディサビリティを共通点として、正典作品とセンセーション・フィクションを比較した。この分析によって、センセーショナルな文学的描写が特有のジャンルに限らず同時代の作品において普遍性を持つ重要なテーマであることが明らかになった。さらには、センセーション・フィクションが、ディサビリティを巡る否定的な言説に疑問を呈するためにセンセーショナルな要素を利用したジャンルであり、その点において最も上手くセンセーションを利用したジャンルであることを検証した。

3. 研究の結果

本研究では、ヴィクトリア朝小説に描かれるセンセーションとディサビリティの表象、およびそれらの関連性を分析し、センセーション・フィクションと同時代に出版された正典作品の共通性を再考した。

センセーション・フィクションに関する先行研究とディサビリティ表象に関する先行研究を広く調査し、特に過去 10 年ほどの間の研究動向を整理した。それにより、センセーション・フィクションの枠組みで他の同時代作品を研究対象とする研究は少なく、本研究が貢献できる余地があることを確認できた。イギリスにて現地調査を行い、大英図書館やオックスフォード大学図書館で資料調査を行った。日本で入手することが困難な研究書を閲覧することができ、またヴィクリア朝期に出版された小説の原本を閲覧し、当時の出版状況や読者層の調査をすることができた。ハワースのブロンテ博物館にも訪れ、当時のブロンテ家の生活や執筆環境について実際に目で見て調べることができた。またブロンテ博物館が現在まで保存されてきた過程や観光地として維持する工夫についての展示も調査し、ブロンテ家とブロンテ作品の現在の受容についても理解することができた。これらの調査と研究の成果は学習院大学の『研究年報第 72 輯』に発表した。シャーロット・ブロンテ作『ジェイン・エア』をセンセーション・フィクションの系譜に位置づけ、「狂女」を重要な要素として扱っているブラッドン作『オードリー夫人の秘密』(1862)やウッド夫人作『聖マルティヌスの前夜』(1866)に重要な視座を与えた作品であることを論じた。

本研究の成果として、センセーション・フィクションとディサビリティという、日本ではこれまであまり取り組まれてこなかった分野の研究を発表できること、センセーション・フィクションと正典作品との共通性が明らかになり、センセーション・フィクションの再評価に貢献することが期待されていた。『ジェイン・エア』についての論文を発表できたことで、期待していた成果をひとつ達成できたと考える。また、他の作品についての調査も大幅に進んだ。それらの成果も論文として発表予定である。

ヨークシャー、ハワースのブロンテ博物館



ブロンテ博物館、ブロンテ姉妹が執筆をしていた部屋



4. 研究者としてのこれからの展望

現在博士論文を執筆中であるため、本奨励金で調査を進めることのできた成果をまとめて発表する予定である。本研究で、センセーション・フィクションという特有のジャンルと同時代の正典作品の共通性を確認することができ、まだ発展途上にあるセンセーション・フィクションの再評価の流れに貢献することができた。このテーマは大いに発展性が見込まれるため、今後は本研究で扱わなかった他のセンセーション・フィクション作品と正典作品にも研究対象を広げたい。それによって、文学作品におけるセンセーショナルな描写がヴィクトリア朝のディサビリティを巡る否定的な言説を問い直す要素となっていることを引き続き探求していく。事例研究を増やし、本研究のテーマのもとより大きい成果を発表することを今後の目的とする。そして、ディサビリティというテーマだけではなく、それに関連するケアの描写や、病いや様々な身体的な表象も含めて研究対象としていきたい。その研究は、ディサビリティを巡る現代の問題を考えるうえで助けになり得る、社会的意義のあるものになると期待される。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

女性研究者奨励金に採択していただき誠にありがとうございました。奨励金をいただきましたおかげで、イギリスへ現地調査に行くことができました。イギリスでは、19 世紀に出版された小説の原本を確認し、作家の故郷を訪ねました。本研究のために大変有意義な調査になったことは言うまでもなく、文学が現代の人びとにどのように受容され楽しまれているのかということについても理解することができ、文学研究の原点に立ち返ることができました。日本私立学校振興・共済事業団の皆様、ご寄付を賜りました皆様、この度はご支援くださり誠にありがとうございました。文学研究を通して社会へと貢献できるよう、これからも精進してまいります。